

教学 IR を根拠とする教学改善の事例紹介

大阪大谷大学 教育・学修支援センター

本学では、教育・学修支援センターおよび大学 IR 委員会を中心として、学生を対象とした基幹3調査（新入生調査・学修行動調査・卒業生調査）のほか、入試情報、学業成績、汎用的能力を測定する外部業者によるアセスメントテストの結果等を分析し教学改善に資する取り組みを行ってきた。

以下、例年行なっている取組、および新たに2024年度に行った取組を紹介する。

<例年行っている取組>

・授業評価アンケートによる授業改善

学生による授業評価アンケートを、少人数授業や学外実習を中心とする授業等を除いたすべての授業科目において実施している。授業評価アンケートの集計結果は担当教員にフィードバックするとともに、各教員からは授業ごとに現状分析と改善計画、学生からの自由記述による意見に対するコメントをまとめた「考察シート」が作成され、本学学生を対象として公表される。

アンケートのうち、授業への満足度に関する評価（5件法により、低い評価から高い評価にかけて1～5で回答）の全学的な平均は以下のように推移しており、若干の増減はあるものの、この数年間は増加基調にあると言える。

	2021 前期	2021 後期	2022 前期	2022 後期	2023 前期	2023 後期
満足度の平均	4.20	4.22	4.30	4.32	4.28	4.36

<2024年度に行っている取り組み>

・GPA を活用した学生への個別指導体制の強化

従来より、学期ごとの成績指数である学期 GPA が 1.5 未満である学生に対して、アドバイザー教員による個別指導を行ってきた。過去の1年次における学業成績とその後の中途退学との関係を分析した結果、1年次における GPA が学科・学年の平均値より 1.0 以上低い学生は中途退学が多くなることが明らかになった。そこで、上記の条件に加えて、学期 GPA 学科・学年ごとの平均値よりも 1.0 以上低い学生も個別指導の対象とすることとなった。

以上